

ドイツ社会における異文化間教育の学校での役割

エスヴァイン三貴子

第二次大戦後の経済復興を達成する手段として、ドイツ政府はすでに 1950 年代（一番初めに募集したのは 1955 年 12 月イタリアからの移民労働者だった）から労働不足解消のために移民労働者を国内に受け入れる戦略をとりました。その戦略の基盤には、移民労働者たちはある期間働いてお金を稼いだ後に母国に帰るということを前提にしていました。しかし、この政府の考えに反して移民労働者は母国には帰らず、自分たちの家族をドイツに呼び寄せるようになり（特にトルコからの移民労働者達）、その結果異文化で育ちドイツ語ではない母国語を持つ子供たちが大勢ドイツ社会に流入することになりました。それで、ドイツ政府も戦略を考え直して、ドイツの学校に彼らを受け入れる体制を作ることに尽力を投じるようになりました。そこで異文化間教育というものが教師になる学生たちにとって重要な意味を持つようになっていきました。

ドイツ社会では民主主義による政治体制を維持していく事が重要な国の目標になっているので、この社会に住む人間は誰でも皆平等に扱われなければならないという観点から、特に社会的に地位の高い職業に就く機会をドイツ社会に住むどの子供たちにも平等に与えなければならないという立場をとっています。しかし、ドイツの学校に入学してそこで学んでいる移民労働者の子供たちがこのような社会的地位に就くことが可能な能力を得られるような学校に入学する機会がドイツ人の子供よりも少ない事、つまり彼らが差別されている事が、いろいろな社会科学の研究調査結果（一番有名なのは OECD の 2001 年から始まった学習到達度調査; [PISA (Programme for International Student Assessment)]) で判明して、これを是正するいろいろな理論が教育学特に比較教育学の間で出てきました。

そこで今回このサロンで、私が大学で担当しているゼミナールで、教師養成のコースを履修している学生たちに将来高等学校や職業学校の教員になったときに移民してきた子供たちをドイツ人の子供たちと差別なく同等に指導していけるような能力をつけるために、どんなことを教えているかをお話しするつもりです。そういう意味で私の大学教師としての経験談と思って聞いていただければよいと思います。